物故社員供養塔献金追加表

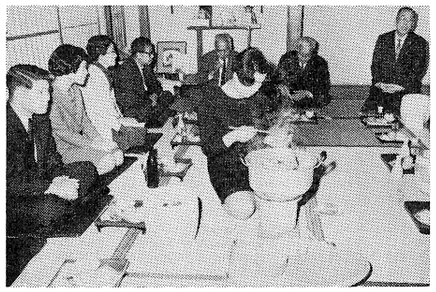
(1口)	平高弥之助	(10口)
西山磐夫	(3口)	木村庄三郎
浜岸津英一	丸山桂一	(30口)
吉田宣蔵	北保	賀集益蔵
西村正一	(5口)	(会社名)
松本ぬい	松代和四郎	K.K.呉造船所
		50,000

御礼のことば

この度の供養塔建立も多額の浄財に依り順調に進んでおりますのもひとえに諸賢の御厚情と深く感謝しております来る四月二日にはゆかり多き篠原祥竜寺山内にて華々しく除幕式を取り行なわれることと存じます。尚、甚だ僭越なることばで恐れ入りますが基金未納の御方はそれ迄に何卒御喜捨下さるよう切に御願い申上げます。

柳田義一氏句集
出版記念祝賀会の記

師走も半ば過ぎとなれば、そこはかとなく人の動きも心忙しい、冷え切った巷のあわただしさをよそに、今宵二十日の夕べ、生田神社社務所奥の広間では、柳田義一氏を囲んでほのぼのとした温さの中に、氏の出版記念祝賀会が催された。柳田さんが年来の心のたたずまいを結集してこつこつと積み重ねて来られた俳句の集大成の第二編が、その代表作に因んで「武者絵の凧」と銘題して出刊。氏をめぐる周辺の近しい人々へ頒布された。全編氏の直筆を刷り和綴和



・生田神社特製のお料理で…

ある。この席に列する三十有余名装釘の美々しくも豪華な限定版では何れも幾年来久しく氏と心を通わせまた親しい者ばかり。その贈呈を受け完成を見て我が事の様に喜び感激し、心からなる讃辞を呈しては祝盃を交わすのであった。司会者仙賀松雄氏（県生活科学センター）から指名があり列座の面々から隔意のないスピーチが始まる。前美術館長あり幼稚園長ありレヂャー会社の社長や神戸市編纂委員や各界の名士の顔ぶれに氏の交際の幅広さがうかがわれる。辰巳会からも畑さん前田女史と私が末席に侍べる。柳田さんの左右に実弟の彦次さん、藤田健作さん、令息の甲二君、祥三君が共にフィアンセと一緒に終始顔をほころばせて盛んにフラッシュを焚いて居られた。生田神社柳田さんゆかりの土産神（うぶすな）であり宮司権宮司は早くから氏に兄事せられ居し事とて、社務所を揚げての奉仕につくされ、満座の一同も格調豊かな神社の饗応に心ゆくばかり湛能した。

最後に一同から心をこめた記念品を贈り氏の美挙と労を称え、続いて同氏からは感激溢れる謝辞と将来の交宜を熱望する言葉があって、名残り惜しくも会を散ぜらる。逝く年、来る年に哀惜と希望を託し、声を和して盃を乾す、戸の外はしづかに小雨がしのび落ちて居た。（木畑生）

武者絵の凧落ちて茶碗の中が照る
花火師は花火打上げ天を見ず
義一

感じたまま

藤本光城
（松方金子物語著者）

題して「武者絵の凧」。近頃珍しい和綴じの、柳田義一氏の句集を読んで、作品のいちいちからうける感動は大きい。じつは数年前、氏の第一句集「花火師」から、現代俳句の鮮烈な表現力におどろいたのだが、こんどは更にその感を深くした。

なるほど武者絵の凧には少年のロマン、若き日の夢がみなぎっている。日本民族が生んだ英雄が豪傑が、可憐な姫君の顔が、赤く美しく彩られ、春霞の空に揚がり、子供らは無心に糸をたぐる。

たまたま落ちた凧の派手な色のかげりが、これはまた炎と土の芸術といわれる、茶盌の肌をさっと一瞬照らしたという、それだけの状景ながら限りない余情。時間と空間の交錯。

俳句には全く門外漢のわたしは、柳田氏のこの「武者絵の凧」の作品を、くり返し自分流に味わってみる。

「両岸が橋を引っぱる麦の秋」
力強い、なにかおそろしいほどの充実感といったものに、あふれる作だと思う。

麦秋一色の広々とした農村風景、流れる川、架せられた橋、村人の小さな影、そこには大自然の目に見えない大きな力と、人間のいとなみが、一望のうちにゆったり横たわって迫る。

神戸は、日本でもとくに現代調俳句の盛んな都会ときいている。なんといってもこの国第一の開港場であり、油絵などもこの街ではじめて個展を開かれたそうである。

してみると、日本有数の貿易商であった鈴木商店に育てられ、俳人片水金子直吉翁と並んで父君富士松翁もときに十七文字をたのしまれたという、柳田義一氏がわれわれのおどろく新鮮味あふるる句作をされるのも、なるほどと思う。

韓国政府から 故西川玉之助氏へ感謝状

明治四十二年十月満州ハルピン駅頭でときの初代韓国統監伊藤博文公を射殺した韓国の民族主義者安重根が処刑の前日当時飜訳官として従軍された西川玉之助氏へ謝意として遺した「庸工難用連抱奇才」の墨蹟を昨年七月十三日柳田義一氏等に依って韓国政府へ贈呈したるところ、このほど同国文鴻周文教部長（文相）官名の感激に充ちた感謝状が寄せられた。去る十一月八日神戸韓国領事館に於て、季源達領事から西川玉之助氏

（代理として山家作蔵氏出席）柳田義一氏等協力の四名に各々感謝状が手渡された。

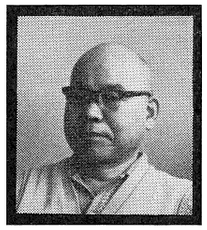
季領事からは今後両国の親善がより深まるものと喜びの挨拶があった。安重根の絶筆は連日ソール国立博物館に展示され多数の観客を集めているということである。

＜上掲写真＞右は西川玉之助氏の遺影。

左は季韓国領事（右）から感謝状を受けられる柳田義一氏（左）

十河さんを偲ぶ記

福本三郎



十河さんが私の大正十五年入社の時の直接の上役であったことと岡山医大病院に長らく入院加療された一年余り近くの倉敷に住んで居ったと言う因縁で僭越ながら偲ぶ記をしるさして頂きます。

八月二十一日旧盆が経って残暑の厳しい朝に訃報を聞きました。三日前に御見舞した時、重態らしい事を承知して居りましたが、どうして秋まで頑張って貰えなかったかと思いつつ岡山の病院へ馳せつけました。御遺骸は車に移される前で した。生前豪放雄大の気風のあった十河さんも今は小さなケースに納められ車は佗しく病院の裏門から出て行くのを只一人御見送りしましたが 悲しい 寂しいお別れでした。

昨年五月の或る日、突然電話で〝岡山医大病院へ入院したので一度来て下さい〟との事で全く思いがけない事で馳せつけた私に〝血の病気す。神戸の医者の勧めで此の平木内科へ来た〟との御話がありました。

岡山医大の平木内科と言うのは皇女池田厚子さんが敗血症で入院された事もあり天皇の臨御もあった病棟であり其の道の権威であります。然し十河さんは御自身は外見少しも病人らしくなく、御本人も不本意で無聊をかこって居られるよう御見受けしました。時々不意の発熱があり輸血されて居りました。御病気は〝白血病〟或は〝再生不良性貧血〟どちらにしても大変むつかしい病気だと判りました。入院が長くなって夏が過ぎると御病人は神戸へ帰り度いといささか焦るような心境となられたと思いますが、之も延々になって正月も近づいてやっと一応退院されて神戸へ帰られました。だが之も全快退院と言う事ではなく今年の春の終りに再度入院致されました。其頃私が神戸の御宅で揮毫張へ書いて頂いた句に〝湯上りの気持を慾しや常日頃〟とありますがおそらく之は十河さんが自分自身に言われて居る気持ではなかったかと推測します。

其の頃から〝此の病気は全快と言う事は困難かも知れないが充分なる治療と静養によって何年かの余生を楽しみたい〟と言う意味の事を言われました。死病と対決して精神的な苦しい日々を送って居られるかのようで何ともお気の毒な事と帰り道に考えた事もありますが、然し御本人は明朗活達な人ですからジメジメと愚痴を言われる事はありませんでした。何時も話は辰巳会の事。昔の鈴木の事。綿業界の事。又世話好きの故人は自分が病床にあるのも忘れて色々周囲の人の事を心配されました。暑さに向う頃より病床生活の長さと気分的にも少し弱って来られました。八月四日容態やや悪化さると見て柳田さん畑さんへ御通知しました。身体の方々が痛いと訴え又言語障害が現れました。八月十七日次第に弱って居られましたが聞きとり難い言葉で〝よく来て呉れた。昨日辺り一度逝ったのに生き返った〟と微笑して握手してお別れしたのが最後でした。

話は四十一年昔ですが、私が大正十五年三月入社第一歩で貨物課の和田岬出張所で十河さんに御目に掛った時は故人は二十八才位であられたと思います。

◉表紙説明

西陣織帯地（現代）
織師は、武山捨次郎氏です。